みれろあss【らいとさいど】

kakyoin

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

郡道美玲と夢月ロアの短編ほのぼのｓｓ

・ロアちゃんは美玲先生の家に常駐している。

・百合ではないがゆる百合である。

・日常系ｓｓのつもりだが先生のせいで性的要素が消しされない。

・みれろあと書いてあるが主的にはろあみれである。

・わかるー？

目次

みれろあのいち　1
みれろあのに　5
みれろあのさん　12

みれろあのいち

＊＊＊

・喧嘩〜〜郡道美玲の場合

美玲「ロア、あのね？私はあなたに部屋を貸すとは言ったけれどここはあなたの部屋ではないの、そのへん分かっているのかしら？悪いけれどいくら寛大な郡道美玲と言っても許せることと許せないことがあって、あなたはそのへんを理解してない。理解してないどころか私に喧嘩を売ったわよね？喧嘩を売りましたね？売ったの、売ったのよ。あなたにその気がなくても私は許せなかったの。そんな顔してもダメ。私は深く傷ついたの、私にだってプライベートが……あ、あの待って、ロア？ロア？えっとね、その、待って待って落ち着いて。一回深呼吸したらどうかしら？あの、違うわ、誤解よ、私はロアとその、ロアと認識の差を埋めようと思っただけで、違うの。ロアのことが嫌いになった訳じゃないのよ。むしろ私はロアのことが好き、大好き。そこはなにがあっても揺るがないから、ね？だからほら、お願いだからそんな顔しないで？あ、違うの、お願いだから謝らないで。ロアはなにも悪くないわ。ごめんなさい、私の言い方がよくなかったの、ロアはなにも悪くないから、私が間違ってたから。あーごめんなさいごめん

なさいごめんなさい。私もね！私も悪くない！私も悪くないわよね！二人とも悪くないし、私はロアのことが大好き！いい？大丈夫？落ち着いた？……良かった、ロアは本当に可愛いわね。大好き。ううん、そういうところも含めて好きよ。安心しなさい。私はロアが好きだし、郡道美玲は器の広い女よ。あなたの一人や二人全肯定で受け入れてあげる。違うわ、無理してるのではなくて私がそうしたいというだけなの。私はロアを悲しませたいわけじゃないの、一緒に人生を過ごしたいだけ。そのために私が出来ることはなんだってするし、あなたが笑っていれば私は満足よ。そうね、私が間違ってた。もう少しお互いをよく知りましょう。私はあなたのことを知らなすぎたわ。今日は朝まで語らいましょう？ね？あああまあ、そうね。わかったわ、じゃあ3時までには寝ましょう？待ってるわ。じゃあ先にシャワー浴びてるわね？」

＊＊＊

・喧嘩～～夢月ロアの場合

ロア「せんせーあのね？ロアはせんせーの部屋を借りてる身だけどさ、ロアにだっていい加減言いたいことあるよ？今日こそは言うからね？いい？あのね？せんせーさぁ……お？せんせーそのワンピース新しいやつ？あんまり見ないやつなのだ。お？テーブルの上を片付けたら出てきた？え、せんせー片付けしたの!?ええ!?すごいのだ！せん

せーが片付けをするなんて！……お？感想なのだ？……そんなの言わんでもわかるでしょ？似合っとるよ。せんせー綺麗だからなに着ても可愛いのだ。お？お?!待って、落ち着くのだ。あの、明日せんせー朝会あるって言ってたよね？朝早いんだよね？そういうの今日はだめだよ？ロアは、別にあの、嫌じゃないけど、せんせーがね？ロアはせんせーのために……え？お風呂？……。違う違うやめるのだ！やめるのだぁ！だって！せんせーが紛らわしいから！せんせーちょっと黙ってぇ！せんせー！」

＊＊＊

・仕事帰りに困り顔のロアって可愛いわよねという真理にたどり着き即行動に移す郡道美玲

美玲「ロアー？ロアー？帰ったわよー、いるー？」

ロア「おるよー、お帰りなさい」

ロア「あれ？せんせーどうしたのだ？早く上がるのだ？」

ロア「お？お？え？せんせー？なんで無言なの？あとその手はどういうことなのだ？」

ロア「おー……わかった。わかってしまったのだ……おー……」

ロア「……やらんよ？ロアそんなあからさまなことやらんからね。せんせーはさぁ、

そういうの好きかもしらんけどさ、ロアはあんましだからね。そういうことされても困るのだ」

ロア「だから早く上がるのだ」

ロア「せんせー？」

ロア「やらんよ？」

ロア「ね？」

ロア「……せんせーって変なとこ強情なのだ」

――――――。

ロア「これでよかった？あっとる？」

美玲「充電中だから喋らないで」

ロア「お?!」

＊＊＊

みれろあのに

＊＊＊

・晩御飯

ロア「せんせーご飯できたよー、きてー」

美玲「ういー、ちょっとまっちー」

ロア「はやくー、はやくーせんせー。冷めちゃうよー？」

美玲「あー……もうちょっとで作業終わるから、もうちょっとだけ待って頂戴？あとちょっとで……あーどうだろう……」

ロア「まだー？まだー？せんせー？今日のは自信作なんだよ？冷めるともったいないよ？」

美玲「あの、行きたいのはやまやまなのだけど……なんかこれ急にクッソ重いのよね……あーやっぱダメだわこれ。ごめんなさい、ロア先に食べてて頂戴。終わり次第すぐそっち行くから」

ロア「えー、嫌なのだー。せんせーと食べたいー、せんせーに食べてほしくて頑張ったのだー、せんせーが食べないと意味ないのだー」

美玲「はいはい、すぐ行くからね？そんなにかからないから食べてて頂戴？あと……そうねぇ、あと3分くらいできっと終わるから。ね？」
ロア「むー……わかったのだ。早く来るんだよ？待っとるからね？」
美玲「ＯＫ。ロアの美味しい料理、楽しみにしてるわ」
――――。
ロア「せんせー……？」
ロア「せんせーまだ？もう3分経ったのだ？」
美玲「あぁロア、その、ごめんなさい。もうちょっと待って。さっきこのバーが動いたからもうすぐだと思うの。あともうほんとすぐ終わるから」
ロア「おー……ほんと？あと何分？」
美玲「あと何分?!えー、あー……そうね、あと5分。あと5分だけください。これ保存してから、あと手直しすれば終わりだから。ほんとうにもう終わり」
ロア「……うん、わかった。あと5分ね。……頑張ってね？待ってるからね？」
美玲「ほんと優しい子ね、ありがとう。あーもうお腹ぺこぺこだからロアの料理が恋しいわ。終わったらすぐ行くからテレビでも見てて頂戴？」
――――。
――――。

ロア「……。……。せんせー？」

美玲「違いますー、私がクソなんじゃなくてこのパソコンがクソなんですー。あーやっと最後よー、もー。今何時？1時？結局こうなるのね……。あ、あとね子豚たち、あなた達ちょっと勘違いしてるようだけど、これサービス残業みたいなものだから。本来家にまで仕事持ち帰ってやる方がおかしいんだからね？しかもこれ他人のよ？なんで私が他人の仕事を家にまで持ってきてやらなきゃならんのかと、そういうことですよ。酷くない？あ、というか私偉くない？子豚たちもっと褒めなさい私を、郡道美玲を褒めなさい。身を粉にしてサービス残業をしてる郡道美玲を褒めなｓ……!?」

ロア「せんせー偉いね、よしよし」

美玲「あ、ろ、あの、違うのその、あの、思ったより長引いて、作業効率が、えっとね？」

ロア「せんせー　一回ミュートにするね？」

ロア「あのね……ロア全部わかってるから大丈夫だよ？怒っとらんよ？」

ロア「ご飯せんせーの分ラップしておいたからあっためてくるね？」

美玲「……っっっ！」

ロア「え!?せんせー!?やめるのだ！机に頭をぶつけるのはやめるのだ！怒っとらんから！ほんとに怒っとらんからぁ！」

美玲「違うの、今とても自分が許せなくなってしまって……」
美玲「悪気はなかったの。約束の時間に明らかに間に合わなかったから、徹夜覚悟でダレないように配信を……」
美玲「でも私が間違ってた。私が間違ってたよぉぉぉぉごめんなさいロアぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
ロア「や、せんせーそんな、そんな泣かんでー。ほら、ご飯あっためにいけないのだ。ね？せんせー？……あーもー、しょうがないせんせーなのだー」
美玲「……ひっぐ。ほんと天使……天使すぎて辛い……ひっぐ。すぐご飯食べる。ロアのご飯食べる……」
美玲「あ、ごめんなさい。枠閉じないと。子豚たち待たせてたわね……」
美玲「あれ？……。……え？」
ロア「あーしまったーロア間違ってミュートし忘れたかもしれんー、あーしまったーうっかりしてたのだー……えへへ」
美玲「……マジか」
ロア「さ、せんせー？ご飯食べるよー」

＊＊＊

・豚肉

美玲「お、今日は豚のブロック肉が安いわね。買っとこ買っとこー」

ロア「おー……また豚肉なのだ……？」

美玲「え？だめ？美味しいじゃない豚肉？」

ロア「美味しい……美味しいけどー……おー……」

美玲「美味しい『けど』？……そんなに嫌なら違うのにする？私はいいわよ、鳥でも牛でも」

ロア「あ、嫌じゃないのだ。ロアも豚肉好きだよ？……でもそれ、せんせーが料理するんでしょ？」

美玲「ん？だって今日の料理当番私よね？ロアは私の豚肉料理嫌い？」

ロア「ううん、そんなことないよ？でも……あの……可哀想になるのだ……」

美玲「可哀想……？」

――――――。

美玲「あら、子豚達。なにを安心してるのかしら？縄で縛られたくらいで終わりだと思ったの？冗談でしょ？これからあなた達はあつーい鍋の中で煮込まれるの。ゆっくり、ゆっくり、時間をかけてね？……うふふ、明日の朝には出してあげるわ。せいぜいそれまで私を楽しませて頂戴ね？あはははは！」

ロア「せんせーこれいる？せんせー？これほんとに必要？」
美玲「これをやると子豚達から無駄な油が落ちて味が締まるのよ。今回の子豚達は素直だから前回よりもいい出来になると思うわ」
ロア「おー……」
――――――。
ロア「お!?」
美玲「ね？」

＊＊＊

・先生ＴＳＵＴＡＹＡにＤＶＤ返してください
ロア「ＧＥＯでＤＶＤ借りてきたよー、せんせーご飯食べたら一緒に見よう？」
美玲「あー……いい、けど……ごめんなさい、ちょっと今日疲れたから途中で寝落ちするかも」
ロア「あ、じゃあ明日にするのだ？……ずっと気になってたやつがやっとレンタルになっててね？絶対せんせーと見んといかんなって、新作だけど借りちゃったのだ。もうすっごいんだよ、まずね、キャストが豪華でね、せんせーもきっと凄いっていうと思うんだけど……」

美玲「あーねぇ……じゃあ今日見ちゃいましょうか。ロアの話聞いてたら私も見たくなっちゃった、それ」
ロア「え!?いいの!?……大丈夫せんせー?無理しとらん?」
美玲「しとらんしとらん。……あ、私寝てたら毛布かけといて頂戴ね?」
――――。
ロア「……。……。……。もう食べれないのだぁ……むにゃむにゃ……」
美玲「……運びましょうか」

みれろあのさん

＊＊＊

・珈琲

美玲「はぁー幸せ、休みの日の珈琲ってなんでこんなに美味しいのかしら……」ズズズズ

ロア「……じー」

美玲「やっぱりねぇ、この豆がよかったわね。お店の豆はやっぱり違うわ。……はぁ、幸せ」ズズズズ

ロア「……じー」

美玲「さて、洗濯でもしますかー」

ロア「……。……。……」

ロア「……ちょっとだけ、なのだ」

ロア「……。……。お？……お？……あれ？」ズズ

ロア「……豆が違うから？……ロアが慣れてきたのだ？……これ意外と飲めるのだ……」ズズズズ

ロア「……せんせーこれが好きなのか……うん、わかるまん……」ズズズズ

美玲「(あー口の中クッソ甘いあんなの珈琲じゃないあんなもの認めないあれはもはやジュース私たちの珈琲はあんなものじゃない私は認めないでもロア可愛い珈琲飲むロア可愛いおそるおそるすするの可愛い珈琲飲めてちょっと得意気なの可愛いというかいつもナチュラルに私の珈琲飲むのなんなの結婚したいのそういうことなの私はしたい)」

ロア「……これでせんせーとお茶に行けるね。ちょっとずつ頑張ってよかったのだ」ズズズズ

美玲「ーーーーっっっ!!!!」

ロア「……え、あ、せんせー!?どうしたのだ!?どっか痛いの!?大丈夫!?」

＊＊＊

・みれしゃだい

美玲「少し話をしましょうか」

美玲「あれは今から3時間前……いえ、３０分前だったかも……」

美玲「まあいいわ」

美玲「私にとってはついさっきの出来事なのだけど」

美玲「子豚たちにとっては一生来ることの無い瞬間よ、羨みなさい」
美玲「彼女には72通りの「お」があるけれど」
美玲「どれも可愛いから問題がないわ」
美玲「大丈夫だ、問題ない」
――――――。
ロア「せんせー!!せんせー!!……返事がないのだ。え、どうしよう。まず救急車?100当番?救急車って何番?お?急がんと。ロアがしっかりせんと。えっと、えっと……」
美玲「はっ……」
美玲「ロア?……ああ、私あのまま倒れて……」
ロア「せんせー!?……せんせぇぇぇ!よかったぁぁぁぁぁ!よかったよおおおおお!」
美玲「ロア、苦しい苦しい。落ち着いて」
ロア「だって、だってね、せんせーいきなり倒れるから、びっくりしてね、ロアどうしていいかわからんくて、せんせー死んじゃったらって、頭の中まっしろで」
美玲「そうね、心配かけちゃったわよね。大丈夫だからね、大丈夫だから。ごめんねロア」

ロア「せんせーはいっつもそうやって！謝ればいいと思ってんでしょ！ロアがどういう気持ちなのか考えたことある!?せんせーいなくなったらさぁ……！」
ロア「……せんせーいなくならないで」
美玲「ロア……うん、不安にさせちゃったわよね。ごめんなさい。もう大丈夫だからね、私はいなくならない。私はいつもロアのことを思ってるし、ロアの傍にいるつもり」
美玲「そうね、でも……そうねぇ……」
美玲「顔を上げてロア。ちょっと話を聞いてほしいの」
美玲「……あまり考えたくはないのだけど、この際だから『もしも』の話をしましょうか」
――――――。

＊＊＊
・ロアの変化を敏感に感じ取るも普段通りの対応を心がけるがしかし思ったより素っ気ない態度をとってしまいあれこれ悶々と悩む郡道美玲
美玲「……はぁ」
美玲「……やっぱりロアには早かったかなぁ」
美玲「……でも、私だっていつ死ぬか分からないわけで。それに目をつむって過ごし

ていても、最後に困るのはあの子なわけで」
美玲「……はぁ。私はどうすればよかったのかしら……」
???「なぁにため息ばっかしついちゃってんのかしらー。みれーちゃんらしくないわねー」
美玲「……いたの、うさちゃん先生」
うさちゃん先生「いるわよー、わちしはいつもみれーちゃんの傍にいるって、言ったじゃないのー」
うさちゃん先生「でー？今回はなにをなやんでるのかしらー？」
美玲「……わかってるでしょ、うさちゃん先生なら」
うさちゃん先生「まぁねぇ。わちし、みれーちゃんのことならだいたいわかるものねー」
美玲「……先生は、どうしたらよかったと思う？ああいう時、どうするのが正解なの？教えて？ねぇ……」
うさちゃん先生「うーん、そうねぇー。わちしならねぇ……」
うさちゃん先生「うんち」
美玲「……。……」
うさちゃん先生「うんち」

美玲「……。……まあ、そうね。うさちゃん先生だものね、私はなにを期待したのかしら……」

美玲「ごめんね、うさちゃん先生。無理を言った私が悪かったわ。でもそれじゃ解決しないの、今そういうことをしてる場合じゃ……」

うさちゃん先生「うふふ。みれーちゃん、今のはわちしのこたえよ？わちしなら『うんち』ってこたえるわー、だってロアちゃんのこと、わちしはよく知らないものー」

うさちゃん先生「それで、みれーちゃんはロアちゃんのこと、よく知ってるのかしらー？」

美玲「……私。私は、どうなのかしら。わからない。わかってるつもりだったし、ロアのことを考えてああしたの。でも結果的にはロアを傷つけた。もっと他に言い方があったかもしれない。あれが正しかったかどうか、自信が無いの……」

うさちゃん先生「ふーん……でもねぇみれーちゃん」

うさちゃん先生「みれーちゃんのやり方が正しいかどうかなんて、だーれもわかりやしないのよ」

うさちゃん先生「だって正しいかどうかをきめるのはわちしたちじゃなくてロアちゃんじゃない？それはみれーちゃんがなやんでもしかたのないことなのよー」

うさちゃん先生「うんち」

美玲「……。……」
うさちゃん先生「みれーちゃんはみれーちゃんのできることをやればいいのよ、あとはロアちゃんを信じてまってればいいんじゃないかしらー？」
美玲「……うさちゃん先生、いつもありがとうね」
うさちゃん先生「いいのよー。じゃあわちしは南極に行く途中だから、そろそろいくわねー」
うさちゃん先生「いつでもまた呼んでちょーだいねー、またねー」
――――――。
美玲「ただいま。……ロア？ロア、いる？」
ロア「……。……」
ロア「おらん……かもしれん」
美玲「そう。……あの……もう単刀直入に言うわね、こないだの事なんだけど」
美玲「私たち、一度離れて暮らさない？」
――――――。